

アフリカの今

見人支援の現場から

ザンビア編 ⑤

ザンビアの首都ルサカのようにうねった未舗装の貧困地区は、市街地を囲むように四方に広がっている。その一つ、コンゴン地区の母子支援に取り組んできた吉野川市山川町のNPO法人TICCOは、地域に何をもちらしたのか。TICCOが始めた「コミュニティセンターの栄養教室で助手として働くルーシー・ムホネ・ルカンドさん(38)に案内され、貧困の街を歩いた。

「学びたい」「思い再び

残された希望

ので、雨が続きと辺り一面に水があふれて大変。水が引いた後は「みも残りません」とルカンドさん。水はけの悪さは、コレラやチフスなど伝染病を向けると、突然こちら

に歩み寄り「何撮ってん屋だった。料理人だった。貧困地区は、農村からだよ」とすこまれた。酒職を求めてやってきた人の臭いが鼻につく。酒の4男1女をルカンドたちが定職に就けず、区貧困地区の酒場は、平さんの収入で養っている。日雇いからたむろするが、家賃だけで月収の大半に住み着いて生まれ男たちであふれる。職が半が消えていく。土水道はなく、飲料水は決められた場所でのみ入れなければならぬ。ここでのTICCOの活動は、子どもたちの学校や母親の職業訓練などへの支援。支援しなからといってすぐに地元の暮らしがよくなるほど甘い話はない。分かっていても、厳しい現実が暗い気持ちになる。

自信の絵をルカンドさんと眺めるオベド君。ザンビア・ルサカのコンゴン地区



の温床にもなっている。貧困地区は、農村から職を求めてやってきた人の臭いが鼻につく。酒の4男1女をルカンドたちが定職に就けず、区貧困地区の酒場は、平さんの収入で養っている。日雇いからたむろするが、家賃だけで月収の大半に住み着いて生まれ男たちであふれる。職が半が消えていく。土水道はなく、飲料水は決められた場所でのみ入れなければならぬ。ここでのTICCOの活動は、子どもたちの学校や母親の職業訓練などへの支援。支援しなからといってすぐに地元の暮らしがよくなるほど甘い話はない。分かっていても、厳しい現実が暗い気持ちになる。

をしていたが、コミュニティ安定した職業を得たことで、かねてからの夢の実現を目指すようになっていった。先んき不安な現を指すようになっていった。「もう一度、学校に入学したい。もっと勉強生活にゆとりはないがして自分を高めたい」。

オベド君にも大きな夢があった。「実は絵描きになりたいんだ。有名になってお金を稼いで、お母さんを学校に行かせてあげたい」。そう打ち明けると、照れくさそうに笑った。隣でルカンドさんもほほえんでいる。

貧困の暗闇の中、ほのかな明かりかもしれない。しかし、TICCOがコンゴンに残したものは、確かにあった。それは、明日を信じる希望だった。(勝長英之)